



「アートのまちづくり」 りぼんシティオ那珂川 アート！ ワークショップ

都市景観室では「彫刻のあるまちづくり」事業を見直し、単に屋外彫刻を設置するのではなく、アートを活用して、市民が主体的にまちづくりにかかわっていくことを目的とする「アートのまちづくり」事業を展開している。

この事業の一環として、現在整備が進められているりぼんシティオ那珂川地区において、市民がまちづくりに関心を持つきっかけづくりをするためのアート・ワークショップを開催した。

「りぼんシティオ那珂川地区」は、JR竹下駅周辺の那珂川を挟んで博多区、南区の2つの区にまたがった、83.9haの地区で、周辺には様々な企業や工場が数多く立地するものづくりの街でもある。

ワークショップには、地区内にある美野島、那珂、塩原の3小学校の児童とその保護者、地域の方など約150名が参加した。

まず、地区内の那珂川沿いを中心に河川敷や公園、橋、街角広場など、今後整備が予定されている6つのポイントを巡るまちあるきを行った。自分の住む街でありながら、今までゆっくり歩く機会がなかった参加者からは、「企業や

工場が多い」といった地域の特性に気づかされたり、「こみが多い」などの問題点を見つけたりと、改めて自分の街を見直すきっかけとなったようだ。

まちあるきの後は、各校区内の今後の整備拠点となる場所に分かれて、アーティストと一緒にアート作品を制作し、まちのことを考えるワークショップを行った。いずれも、アート作品を創ることによってその場の風景がどう変わるのか、また、その場が持つ意味をみんなで一緒に考えようというものである。子供たちは、ペンキ塗りをしたり、大きな布を切ったりと、日頃経験したことのない作業にすっかり夢中で、子供たちなりにアートを楽しんでくれたようである。

後日行われたワークショップの報告会では、当日の参加者から、今回のワークショップを通して、将来自分のまちがこうあってほしいというイメージやワークショップで行われたことを何らかの形でまちの中に生かしていきたいという意見が出された。

今回のアート・ワークショップでは、日頃あまりまちづくりにかかわっていない人たちにも参加してもらい、アーティストの感性を通して自分の住むまちを楽しみながら再認識し、将来のまちづくりに関心を持つてもらうことができた。

今後これをきっかけに、ひとりひとりが自分のまちのことを考え、市民自身の手で、まちの物語を作り上げていく、そんな動きにつながっていくことを期待したい。



鎌田啓祐氏による「影をつかまえる」アート。自分の影を記録し、楽しい思い出を作ることが、みんなでまちづくりを考えるための第一歩。



村上勝氏による「赤い羽根」製作とインスタレーション。赤い羽根を置くことで、川の風景がどう変わるのか考えた。



プラント・デモンストレーション（藤浩志氏主宰）による公園緑員のペンキ塗り。子供たちが描いた「こんな公園あったらいいな」の絵。

